



とある妄想の

超電磁本

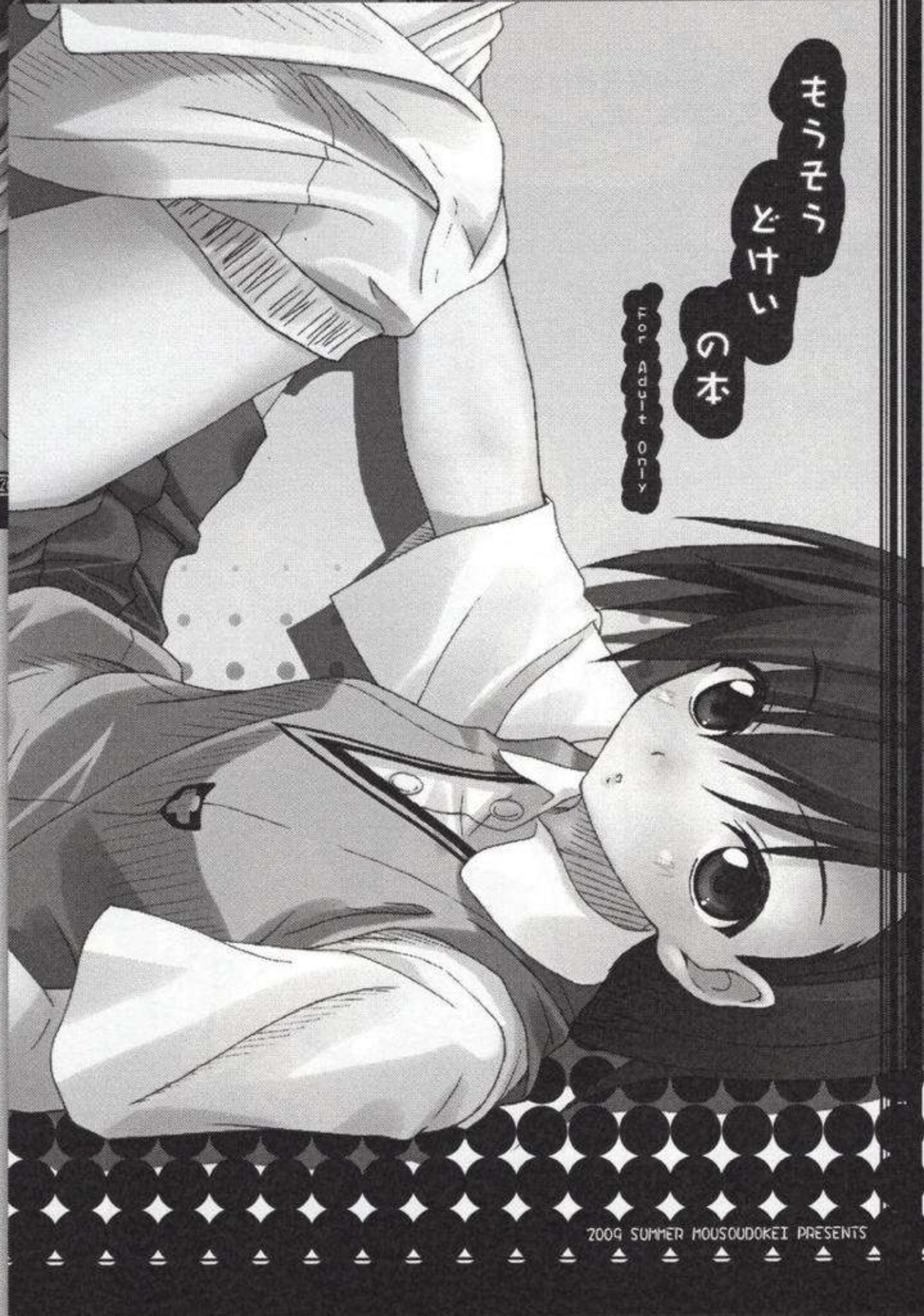
X
irated
成人向け



とある妄想の
超電磁本

X
成人向け
rated

■ ↓ 没表紙 タイトルも違いますし
こうしてみると表情もビミョウだし、
没にしてよかった気がする。
塗りも違うしね/*^ω^*\



もうそろそろ
どけい
の本

LOL 603-4 OEL-Y

■ それでもハーフトーンは
使ってるっていう。

今回初めて覚えた
フィルタ機能だからどうしても使って
みたかったんです (*'ε`*) ミミミ

■ タイトル案をくれた市原さんに
感謝

まえがき

●初めましての方がほとんどだと思います、いわさきたしと言います。
よろしくお願ひします。

○今回初めての同人誌作りという事でわからない事だらけでした。
なので友人に教えてもらいまくりました、自分で調べるような事はほとんどしませんでした(´ω´)^^

●まずは前書きも何を書けばいいのやらさっぱりです/*^ω^*\
このままでは真っ白なページになりそうです、幸先悪すぎます。

●ここまで書いて本の内容を書けばいい事に気付きました。
これは自力で気付きました。

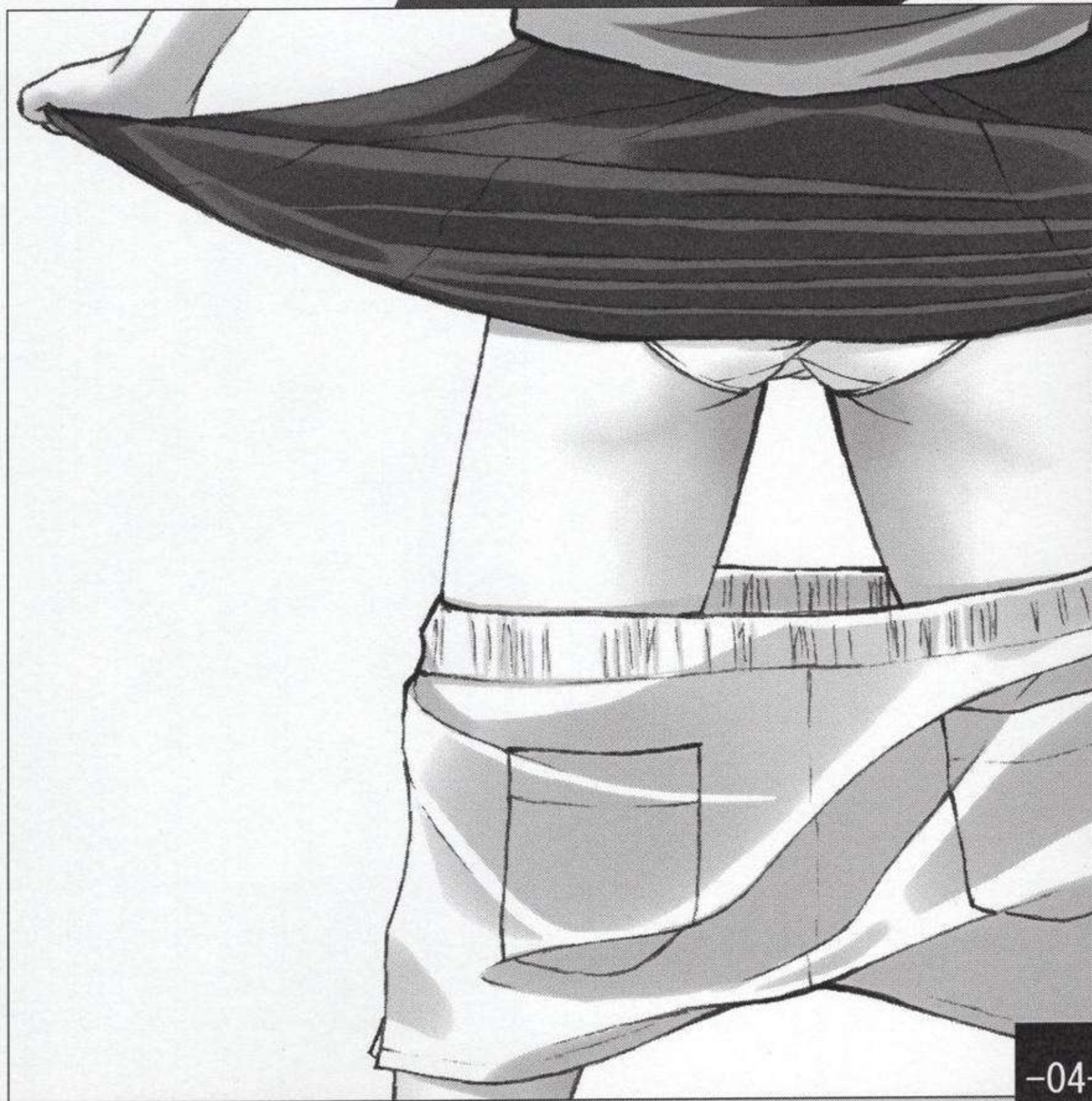
●超電磁砲本です。
美琴が大好きです。
前半は純愛サイド
後半は陵辱サイド
って感じで描きました。

よろしくお願ひします。

では、本編どうぞ~ノシ

□純愛→5Pへ

■陵辱→10pへ



白い半袖のブラウスにベージュ色のサマーセーターに灰色のプリーツスカート、すなわち常盤台の制服に身を包んだ少女が二人、自動販売機に背をもたせかけた。眉を寄せ、唇をきゅつと二文字に引き結んだ姿は不機嫌そうだが、決して怒っているわけではない。

(アイツ、本当に来るのかしら。宿題が終わってないとか補講がどうか言っていたけど)



落ち着かないぞ、ぶりでたまに周囲を見回しては手元の時計を確認し、うつむき、かと思えば空を見上げている。学園都市に七人しかいないレベル5、電撃使いの御坂美琴はここに着いてからずっと前髪がバチバチと火花を散らし続けている。

それは何故か。理由は簡単だ。件のアイツを待っているからである。

そして、ふっと美琴が顔を上げた次の瞬間、前髪が一際激しく青白い光を放した。いつの間にか数メートル先にツンツンと尖った黒髪の少年がやって来ていたのだ。

「よお」
「……お、おっすー」

少女はいつものように手を振り上げてさわやかに応えたつもりだったが、笑顔と動きはひどくぎこちなかった。

「すまねえ、遅くなった」

額の汗を見れば急いでやって来たのがわかる。

それでも美琴はひと言くらい文句を言っでやろうと思いつき、しかし実行することはかなわなかった。いきなり上条に手を捕まれて、声を失ってしまったのである。

(……なによ。びっくりするじゃない)

引つ張られるまま歩きながら、少女はちらりと少年の背を見やる。その時、まるで計ったかのようなタイミングで、

「今日は、デートだろ」

前を向いたままぶつきらぼうに言った上条に、美琴は思わず頬を桜色に染めるのだった。



しばらく歩くうちにいくらか落ち着きを取り戻した美琴は、現在位置がなかなか人が立ち入らない場所であることに気づいた。
(もしかして、ひと気のないところに来てる?)

でもどうして、と少女が口中つぶやくと同時に、上条がゆっくりと歩みを止める。

『御坂』

こちらに向き直った彼は、微かに頬を上気させていた。

美琴はじつと見つめ返そうとして、込められた想いの熱量に照れを覚えて視線をそらす。

「な、なによ」

反射的に少女の回をついて出るのは無愛想な返事で、

こういう時、かわいげのない女だと

自分でも思ってしまうのだが、性分なので止められない。ん、

それでも、彼女は次の台詞を耳にした途端に頭の中は真っ白になった。

「キスしてもいいか?」

「はあ?!!」

この男はいきなり何を言い出すのだろうか。

美琴は突然の申し出に絶句しかけたが、かろうじて言葉をつなぐ。

「どうして急に、こんなところで」

「今すぐお前としたいんだ。……イヤだつて言うなら止めるけどさ」

どうやらからかいや冗談ではないらしい。

そうなる、首を横に触れないのが御坂美琴である。

「……イヤ、じゃないけど、ん」

上条は積極的に否やを唱えなかった少女の柔らかな唇を奪った。
そうしながら服をまくり上げて、ブラジャーも同時に押し上げてしまう。

「あ」

こもっていた熱が解放されて、美琴は小さくつぶやいた。
嫌がつているのではない。むしろ、ここは野外であるというのに期待している自分がある。

「ひもちひひ？」

亀頭を口に含んだまま上目遣いでたずねられて、上条は思わずごくりと生唾を飲んだ。美琴は彼の反応に見開いた目を弓にする。ペロペロとソフトクリームを舐めるように、小刻みに舌を這わせていく。

「ああ、すくいいい」

始める前は手を繋ぐことすら恥ずかしがっていた少女が、『気持ちよくしてあげたい』一心でフェラチオに努める光景は、えも言われぬ優越感と極上の快感を少年にもたらした。

「はむ、あむ、ふうんっ」

美琴は熱を持った棹をしごきながら睾丸に吸いつき、裏筋を脱力させた舌をねつとりと押しつけつつ舐め上げた。しばらくそうした後で、今度はカリの部分を深く啜えこみじゅぶじゅぶと淫らな音を立てながら口唇によるフェラを開始する。

「くっ」

「快感が一段跳ね上がり、上条は小さなうめき声と共にきつく目を閉じた。直後、ぶは、と少女が息を継いだところで濡れた瞳が交差する。」

「ねえ、気持ちいい？」

少年がにわかに応えかねたのは、言うべきかどうかを迷ったのではない。唾液と体液でぬらぬらと光る肉棒を逆手に握り、上下にこする動きと一緒に投げかけられたため声に詰まったのだ。

「あまりに良すぎて、上条さんはいつてしまいたいようなのですが」

低く押し殺した声で告げる上条に、常盤台の少女はにこりと笑いかける。

「じゃあ、もっとしてあげる」

口内粘膜と舌をフルに活用しつつ啜えた肉棒を口いっぱいにはお張る姿は淫靡極まりなかった。更に美琴は深く喉の奥まで使ったとしても多くの快感を与えようとする。少年が時折身を震わせることに、また自身の行為に興奮しているためか、少女の空いた左手は自らの股間をまさぐっていた。

「いいよ、あつ、あん」

横たわる上条にまたがる少女は盛んに悦びの声を上げていた。騎乗位は女性がピストン運動のスピードと挿入の角度や深さを調節できるものだ。

しかし少年はただ受け身になっているわけではなかった。時に勃った乳首をつかんで胸を揉みしだく。

腰を支えることで出沒運動をより滑らかにし、相手の動きに合わせて自らも腰を振る。

そうして想定以上に突き入れられる度、美琴は二際高い喘ぎ声を放つのだ。

「あ、ん……あふっ」

やがて少女は少年の骨盤にクリトリスをこすりつける動きを織り交せて乱れ始めた。喘ぎ声は途切れ、澄んだものへと変わっていき、上条もまた絶頂への階段を二足飛びに駆け上がる。

「くっ、イクぞッ」

「あ、ん、あつ、きて……！」

やがて目のくらむような快楽と共に上条は愛しい人の中で果てた。

しばらく胸に頬を押しつけていた美琴は呼吸が収まるのを待つで少年の頬に軽くキスをした。それから、引き抜いたペニスからコンドームを外し目を丸くする。

「すごい、こんなにたくさん」

「二回の射精でよくもこれだけの量が出るものだ。しげしげと見つめる少女に、上条は小さく苦笑する。

「そりゃあ、御坂の中が気持ちよすぎるからな」

「な……なにを言うのよ、バカ」

激しく赤面した美琴は、まだ絶頂の余韻が残る肉棒をこねくり回して無理やり隆起させると、再び乙女の割れ目にあてがった。

「……えい」

「ちよ、おい」

止める暇もあらばこそ、ずちゅ、という音を伴ってペニスが膣内に飲み込まれる。

「えへへ、入っちゃった」

いたずらっぽく笑う少女の笑みはあまりに淫らで、射精から間なしにも関わらず勢いを取り戻した上条は下からクレバスを突き上げた。

「はん、ふっ、あふ」

上条は貪るようなキスを交わしながら、両手を組み合わせて作った輪で首にしがみついてくる美琴を抱え上げていた。いわゆる駅弁フックの要領でしっかりと腰をつかみ、しとどに濡れたヴァギナへ熱くたぎる肉棒を叩きつけるように突き入れる度、空気を巻き込んでじゅぶじゅぶと淫らな旋律が辺りに響く。背には樹木があるため背をそらせてのけぞることはできず、少女はぶつけられた欲望をすべて受け止めざるを得ない。

「おっきい、あん、ふっ」

幾度となく奥まで貫かれて、美琴はますます乱れ、時折焦点を飛ばしながら、快感を訴え続けた。

動くたびにペニスへと絡みついてくる内壁は脳を焼くような快感を生み、上条は射精感の高まりを覚えて口中うめく。

さすがに中で出すわけにはいかない。と意識の片隅で理性が訴えている。

「御坂、もうすぐいきそうなんだけど」

ゴムを付け直すか、あるいは外に出すか。しかし少女はいずれの選択肢も採らず、

「いいよ、来て」

その声に黒髪の少年は思わず動きを緩めてしまった。

「でも、お前」

「いいの。アンの精子、頂戴」

「……わかった」

絶頂が近いのか自ら腰を押し付けてくる美琴を見て、上条のためらいは一秒を待たず掻き消えた。一度唇を触れ合わせてから、彼はそのまま欲望を加速させるように、貪欲にストロークを早めていく。とにかく彼女と一つになりたい、そんな思いで膣を深く奥底まで灼熱の肉棒で蹂躞する。

「あ、あッ、とう、ま、私、もう……ッ」

美琴の喘ぎ声は切羽詰ったものとなって前髪が激しい火花を散らし、

「くっ、美琴、イクぞッ」

上条は半ば叫ぶように名を呼んでほとぼしる精を愛しい人の中に放った。



『人質は二人。用があるのは御坂美琴お前だ。場所は××ビルの……』

寮に帰り着いてすぐ、差出人不明の封筒に入っていた新聞の切抜きを使った怪文書に目を通すや否や、美琴は身一つで部屋を飛び出した。持てる能力をフルに使ってビルからビルへと飛び移り、たどり着くまでに要した時間は十分足らず。そこは中心部から外れた古い雑居ビルが建ち並ぶ一角だ。

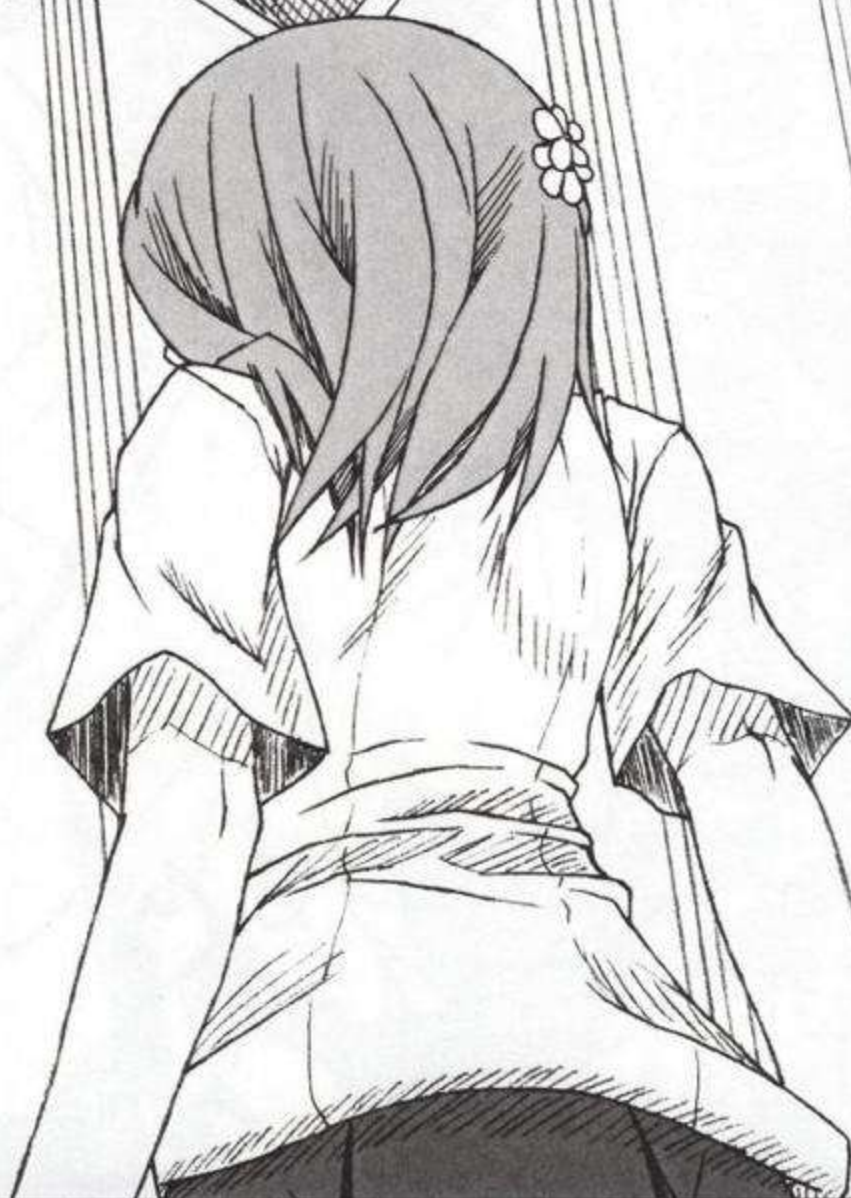
(ここが指定された場所、ね)

電撃使いの少女は我知らず生唾を飲み込んで建物を見上げた。相手は何人いるかわからず、どんな罠が仕掛けられているとも知れない。それでも、ここに佐天と白井が捕らわれている以上、踵を返すという選択肢は彼女になかった。

この状況下でこれだけ落ち着いていられたのは、いざとなれば超電磁砲(レールガン)を初めとする己の能力に絶対的な自信を持っているからに相違ない。実際に美琴はこれまであらゆる難局を切り抜けてきたし、おそらくこれからもないだろう。

(黒子、佐天さん。待ってて、すぐに行くから)

学園第三位の実力をもってすれば、解決できない事件などないはずだ。



出迎える者はおらず、警戒しつつ階段を上った美琴は開け放たれた入り口から漏れ聞こえてくる甘い嬌声に思わず息を飲んだ。足音を殺して入り口脇へと忍び寄り、中を覗きこんで絶句する。



「ほら、はっはっはっ」
そこにはにわか信じ難い光景が広がっていた。白濁した液にまみれた佐天は自ら進んで男のモノを受け入れているように見える。

「もっと、あん、もっと突いてくださ……んっ」

口から涎を垂れ流してよがる彼女の胸を荒々しくつかみ、男はわざと腰の動きを緩めた。

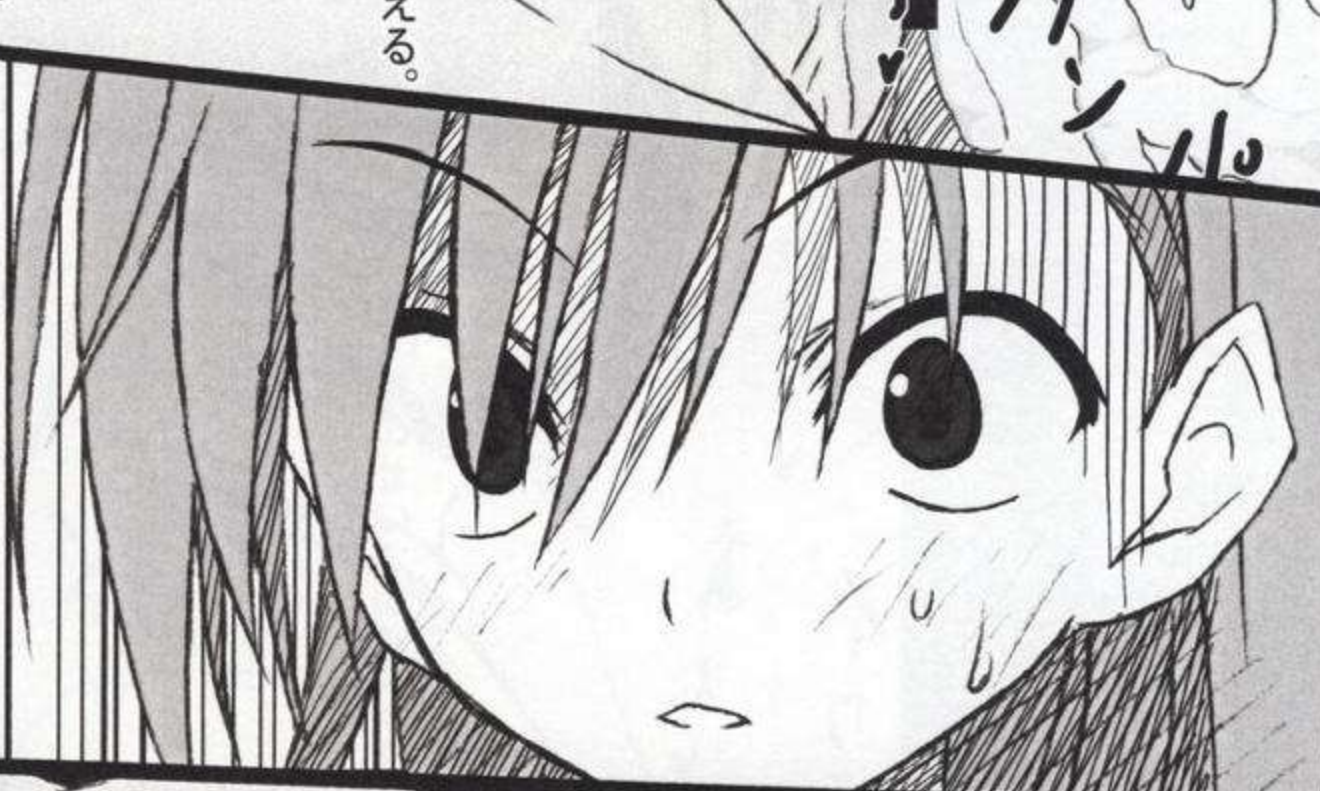
「ああ？ 聞こえねえよ」

「は、はひっ、私のいやらしおまんこをもっと、激しく突いてくださいいい」

半狂乱で懇願する佐天の声に気を良くしたのかゆるやかだった出沒運動は勢いを取り戻し、

「あん、はあっ、ふっ」

焦点の合わない瞳で快楽を訴えるだけの盛りがかった雌と化す。



それだけではなかった。どんな状況下にあっても屈することのないはずの白井は見知らぬ男の尻、しかも菊のすぼまりに舌を這わせているではないか。

「あむ、んう、わたくしにもこの太いのをください」

しかも口を離すたびに淫らな願望を切々と唱え、

「わたくしのいやらしいこころに、おまんこにお慈悲を」



両手で男の睾丸を刺激し竿にはひねりを加えた動きを続けている。愉悦に歪んだほえみは、信じられないことに媚びへつらうものだった。

(何よ、これ)

よく知った者が受ける屈辱に美琴はただ下唇を噛み締めることしかできない。



「こいつらがどうなってもいいのか？」

美琴は下卑た笑い声を上げる連中を睨みつけていた。どうか隙を見つけて反撃に転じたいところだが、もしここで超電磁砲を放てば白井たちも巻き添えになってしまう。

「わかったわ。だから、その子たちに手を出すのは止めて頂戴」

口惜しいが、連中の言いなりになるより他はなかった。

「それで、私に何をさせたいわけ」

電撃使いの少女は激高しそうになるのをかろうじて押し止め、平静を装う。一時的に従う振りをして、油断させなければならぬ。ある程度は好色にみせかける必要があるだろうか。

「そうだな。ストリップショーでもしてもらおうか」

「は？」

美琴は思わず聞き返してしまった。ストリップショー、つまりあの男たちはここで着衣を脱げと言っているのだ。

(アイツにも見せたこと、ないのに)

そんなことをできるはずがない。

と、快樂のお預けを食らった状態にある佐天と白井が口々に騒ぎ始めた。

「あっ、もっと、もっと太いの……」

「止めないでください、あん、お願いですわ！」

聞くに堪えない二人の嬌声に美琴はぐっと奥歯を噛み締める。

「いいんだぜ？ おまえが脱がなきゃこいつらを犯るだけのことだ」

「脱ぐわよ。脱げばいいんでしょう」

「ああ、靴下と靴は残しておいてもいいぞ」

羞恥と悔しさに頬を紅潮させながら、電撃使いの少女は一枚ずつ服を脱いでいく。覚えていなさい、そう胸のうちでつぶやきながら。

「あーあ、俺、コイツに入れちまおつかな」

男たちの二人が最後の二枚に手をかけたまま躊躇する美琴から視線を外しつつ声を張り上げた。

「待って、脱ぐから」

電撃使いの少女はぐっと目を閉じて、股間部分を覆っていたかわいらしい下着をずり下おろす。秘所を隠す気味はない。刺つているのではなく、まだ生えていないのだ。

「ヒュウ、パイパンガール発見！」

「うお、すげえ。マジかよこいつ」

美琴は卑猥な言葉を浴びせられて、あわてて股間に手のひらを重ねた。言い返すこともできず、ただくぐもったうめき声でうなることしかできない。

「なかなか楽しませてもらったぞ。やはりお嬢様はそうでなくては」

リーダー格の男はニヤリと笑って、指を弾いた。

それを受けて腹回りが極度に豊かな眼鏡の男が立ち上がり、注射器を取り出す。

「な……」

常盤台のエースは二瞬自分が裸であることすら忘れる程の衝撃を受けた。何を打とうとしているのかは不明だが、ブドウ糖でした、というオチでないことだけはわかる。

そこで、彼女はある可能性に気づいた。白井や佐天があんな風に乱れているのは、もしかして薬のせいなのだろうか。

「ウツでしょ、ちよつと、やめて」
「ダメだね」

いつの間にか背後に回っていた男に体を押さえられ、もう二人がその間に注射した。美琴はチクリという痛みを硬くして、得体の知れない薬物が体内へ注入されるのを見つめることしかできない。

「準備完了だな」
「いったい何を……」

レベル5の少女は腕を押さえ、後ずさりする。男たちはにやにやと笑うばかりだ。

その時だった。

「……ふ、あ、つく」

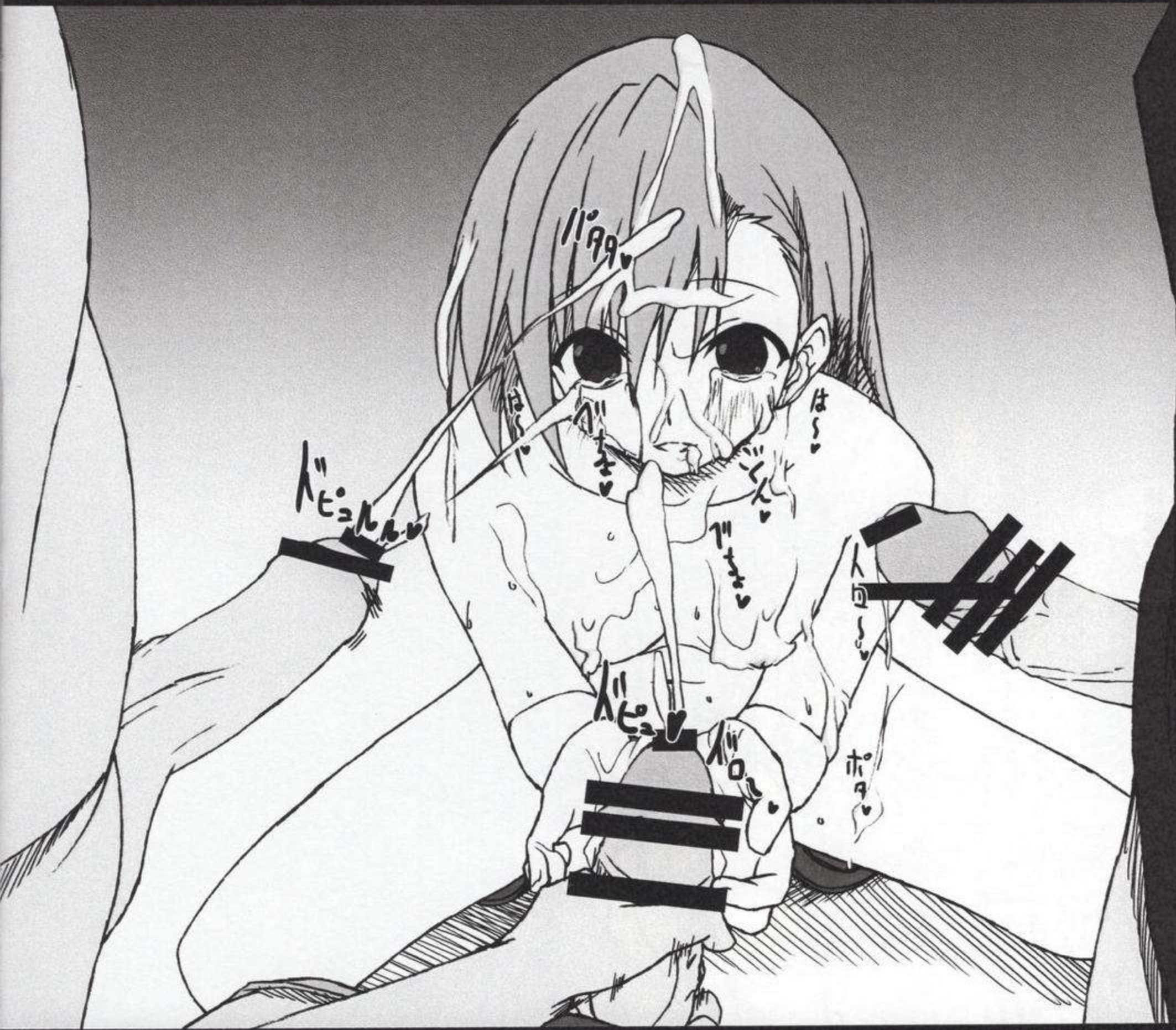
美琴はいきなり体の奥に燃えるような熱さに襲われた。ためらいは長く続かず彼女はそれを鎮めようと胸と股間をまさぐるが、まったく物足りない。

（あ……ん、何よこれ）

焦れた彼女は唾液で湿らせた指を膣にあてがい、挿入した。破瓜の痛みと異物感は押し寄せる快楽に流されて、指が止まらない。

「お前たち、まだ手を出すんじゃないぞ」

男たちのギラギラとした視線にさらされていることも忘れて、電撃使いの少女は一心に膣内をかき回した。ぐちぐちと淫らな音を立てながら、御坂美琴のオナニーショーは熱を帯びていく。



「はん、あ……んう」

美琴は快楽を満足に得られないことに焦っていた。陰唇に濡れた指をこすりつけ、もう一方の手で膣内をかき回すも、快楽のレベルは一定の水準までしか届かない。気持ちいいが、それだけだ。白井や佐天のように、我を忘れたような悦びは得られない。

(どうしてよ。もっと、もっと欲しいのに……ッ)

今なら隙だらけの男たちを倒すことができると言うのに、電撃使いの少女はただ、気持ちよくなることだけを考えていた。

「くく、物欲しそうな目をしやがって」
「……ッ」

羞恥心を掻き立てられる台詞に、美琴は抵抗できない。火照る身体が彼女を雌犬に成り下がらせる。

「だったらギブアンドテイクだ」
「え……？」

言葉の意味が分からず目を瞬かせる少女に、男はペニスを突き出した。
「そのかわいいお口でご奉仕しろって言ってんだよ」

刹那の逡巡を挟んで美琴は言われるままに鼻先でそそり立つ肉棒を啜えた。否、啜えようとした途端、ぱしっと平手で頬を打たれる。

「痛っ、じゃねえよこのドブスが。歯を立てないようにしろ、バカ」
「は、はい」

常盤台のエースは唇で前歯を覆うようにペニスを口に含み、その途端に後頭部を押さえ込まれて容赦なく喉の奥を突かれた。

「こいつが欲しかったらきっちりしゃぶれ。でなきゃいつまでもお預けだ」
男は仰け反ることを許さず、更に隆起した己の分身で口腔を犯し、少女をなじる。

「うぶっ……ん、ん」

美琴はむせ返り、涙目になりながらも必死で舌を動かしたぎるブツを口腔に受け入れた。彼女は必死だった。自分の指だけでは満たされないこの高ぶりを、どうにかしたいという一心で、嗚咽を殺してフェラチオを続ける。

「ひゃっはア、最高だな」この女！ さすがはレベル5、あそここの締まりも学園の頂点ってかー！

クレバスを蹂躪する肉棒は、指とはまったく比較にならないほどの快楽を美琴にもたらした。しかし彼女には恥らう時間はおろか喘ぐ暇すらない。

手と口を使つて挿入者以外の男たちに奉仕しなければならぬからだ。

「どうした、手が止まってんぞ？ 突くのを止められたいか」
「ん……どう？」

少女は必死になって深く咥え込み、手を動かすことで止められたくないと訴えた。そうまでして言いつけを守ろうとする美琴に興奮したのか、リーダーの出況運動は次第に激しさを増し、ちゅぷ、ちゅぷと淫らな旋律を奏でる接合部が一層熱を帯びていく。

と、床に膝を突いた姿勢で電撃使いの少女に口で奉仕させていた男が上ずった声を出した。

「ヤベ、俺もう出ちまっつ」
「俺にかけるんしゃねえぞ」

反対側で美琴に肉棒をこすらせていた一人が下卑た笑いで茶々を入れるが、我慢の限界なのか男はぐいぐいと口腔の奥に自らの分身を突き入れる。

「おら、しっかり飲めよレベル5の……イクぞッ」
「ん……ッ」

荒々しく頭を捕まれて動けない少女の喉に、猛々しい性の奔流が注ぎ込まれた。だが、むせ返ることは許されない。目を白黒させつつ涙を流し、嗚咽を漏らしながらも美琴は精液を飲み下す。

そしてようやく解放された彼女の口を次の肉棒が塞ぐとするが、待たがかった。

「次は俺の番だ。自重しろ、お前たち」

リーダーはそう宣言するや、しっかりと腰をつかんで隆起するツンで子宮を突く。小柄な彼女が受け入れるには大きすぎるそれは、薬によって快楽の虜となつた美琴にとって何にも勝る悦びを生む。

「あん……は、ん、や、そ……」



だらじなく開いた口から滴るのは涎かあるいは男の放出物か。それに気づいてさえないのか、少女は淫らな表情でよがり続けた。ヴァギナがしどろに濡れているせいか、結合部はびちゃびちゃと水が水を飲むような音を立てている。

「しっかり締めろよ御坂美琴！」
「びゅ」

リーダーはクリトリスをきゅつとつまみあげ、膣内の圧力は跳ね上がった。その後はまさぐる動きで小突起を責めつつ腰使いを早めていく。少女の喘げ声は甲高いものとなり、男はぐつと奥歯を噛み締めた。

「イクぞッ」

叩きつけるような二撃と共に発されたリーダーの低く押し殺した声を合図に、

「……ッ……」

美琴は仰け反つて絶頂を迎え、同時に彼女の体内へ大量の精子がぐちまけられた。

艶を帯びた嬌声はとどまる所を知らず、部屋に響き渡る。

「もつと、もつと深く、突いてください……はん」

盛った雌犬のように快楽を求める美琴を男は下から突き上げた。パン、パンと肉のぶつかり合う音が辺りに響く。

「くう、ん……あッ」

少女の尽きない欲望を満たすべく、男は腰をくねらせながらペニスを子宮の奥までねじ込み、抜ける寸前まで引き抜くという動作をひたすら繰り返した。乙女の割れ目は幾度となく欲望を受け入れたせいか充血しているが、薬の効果で痛みはない。感じていないわけではない。それすらも、快楽と化しているのだ。

「手が止まってんぞ、もつとすれ」
「ん……はい、あん」
言われるままに熱い肉棒をしごき立てる美琴の瞳は虚ろだった。すでに彼女の脳は麻痺したも同然で、気持ちよくなるために必要な動作を条件反射で行っているに過ぎない。

「乳首おっ勃てやがって、この淫乱が」
「あ、はふ、美琴は……いやらしい雌豚です、あん」

少女は貪欲に快楽を求め、男たちの精を授かるためにどんな屈辱的な台詞も肯定する。否。今の美琴はヴァギナ、口腔粘膜、視覚、聴覚、嗅覚、あらゆる部位と感覚を性器としているのだ。

「もつと締める豚ア」
「はい、あん」

いつしか少女は緩急をつけた出沒運動に合わせて膣内の圧力を調整する術を身につけていた。自らの体液とスpermが入り混じったそれでめめる肉壁は、男たちの耐久力を一気に奪い去る。

「くっ、出すぞッ」
「は……ん」

射精を終えた男は余韻に浸る間もなく再び勢いを取り戻したリーダーに押しつけられ、彼はすぐさま美琴のクレバスに挿入し叩きつけるようにたぎるペニスで突く。そうしながら、彼はニヤリと笑ってこう言うのだ。

「欲しいんだろ？ 豚は豚らしく鳴けよ」
「はふん、あッ、あふ、ぶひい、ぶ……あッ」

誰がこれを信じるだろうか。男たちのエグスにまみれ、豚の真似までして男根を渴望する少女が常盤台のエースであると、一体誰が信じるだろうか。

美琴はピストン運動の揺れに身を委ねながら、快楽のうねりが高まりつつあることを知覚していた。

「中に、美琴の中に……あッ」

絶頂が近いのか切羽詰った切れ切れの喘ぎ声を連呼しつつ自ら腰を押しつけてくる少女に、リーダーは欲望を加速させるように貪欲にストロークを早めていく。

「おら、望みどおり出してやるよッ」

男が叫びと共に肉棒を深々と奥に突き入れた瞬間、美琴は身体を震わせながら一気に高みへと昇りつめ、

「あ……あん、は、はっ……ッ……」

最後は音のない悲鳴を発して身を強張らせ動きを止めた。

「しかし、さすがは常盤台のお嬢様だ。いい締めり具合だったぜw」

「まったくだな。女は初物に限る」

「あーあ、やりすぎちまったよ。腰が痛エー」

「はは、パーカ。体鍛える、体ア」

「走り込みでもするか？ それとも二晩中犯すか」

「よし、次の獲物は徹夜でフアツクだなw決まりだw」

「真つ先に音を上げるんじやねえぞ？w」

「言ってる。俺のチンポは種が尽きでも折れやしねえw」

仲間たちの下品なやり取りを聞きながら、美琴を担いでいた男が半身で振り返った。

「で、こいつはここに捨てておけばいいんだよな」

「ああ。当分使い物になんねえだろうし、」

「さすがにバラしちやまずいだろ」

「違いねエw」

リーダーのブラックジョークに周囲がどつと沸く。

「それじゃあな」

腰の痛みを訴えていた男が

ぺしぺしと少女の頬を

手のひらで叩き、ひらひらと手を振る。

「……………」

回々に感想を言い合う声が遠ざかる中、ゴミ捨て場に放置された放心状態の美琴はゆっくりと瞼を持ち上げた。どうやら男たちはどこかへ行ったようだ。

（黒子……は、無事よね。佐天さんも……）

しかし彼女の心の声に応える者は誰もいない。それでも、美琴は安堵のつぶやきを胸中こぼす。

（よか……った）

その時の穴という穴を犯し尽くされた雌豚の指がびくりと動いた。先ほどまで散々突かれ続けていたヴァギナの空虚さを埋めようと、無意識に体が反応したのである。

「あ……ん」

こぼれ落ちた雫は男の精液か、あるいは彼女自身の愛液か。濡れた小突起をまさぐりながら、身も心も堕ちきった美琴の手淫はいつまでも続く。

否。

おそらく次の挿入者を迎えるまで、少女の自慰は終わらない。

これは御坂美琴にとつて、無間地獄の始まりに過ぎなかった。

あとがき

●最後まで見てくれてありがとうございました。
前書きでも言いましたが、本作の初めてだったので色々思いついた事を試してみました。
とても実験的で申し訳ない出来になっている可能性が非常に高いです…（´・ω・`）

今回わからなかったこと

フォントサイズ

性器の消しの処理

この三つは特にどうしていいかさっぱりでしたぜえ…

フォントサイズは、まあ読めればいかなって思いますが
消しはねえ…、小さすぎたら（w）㊄㊄！だし大きすぎても逆に見にくいし…って感じでとても悩みました。
なにやら今はモザイクよりも黒消しが主流みたいなのでそれに習ってみたんですが、どこをどれだけ
消せばいいのかもさっぱり/*^ω^*\

無事に頒布出来ればいいんですけど…。

没にした表紙が一番最初に描いたんですけど、やっぱり表紙が一番最後に描いた方がいいですね？
本編がいてる間にちょっとでも上達する可能性あるし、そのキャラ描くの慣れるし

前書きよりも大分語れるようになりました。
皆さんにとっては十数ページぶりですが、僕にしたら1ヶ月くらい経ってからの後書きなので
かなり慣れて、ふふふ、色々語れる余裕が出てきました。

それにしても色々な人に手伝ってもらってこの本作る事が出来ました。
ありがとうございます。

れーそさん (<http://cage.lio.jp/ren/>)
印刷所とか色々教えてくれてありがとう。

鈴原さん (http://www.geocities.jp/golden_banded_lily_2004/)
文書いてくれてありがとう。

市原さん (<http://hw001.gate01.com/ys-room/>)
タイトルくれてありがとう。

そして皆さん
読んでくれてありがとう。

今回試した事が上手く出来てれば…次こそは漫画描く(ｷｯ

ではまた /シ

あ、感想ください。
※褒められて伸びるタイプです。

とある妄想の超電磁本

-奥付-

■発行日：2009/08/14

■発行：妄想時計

■印刷所：POPLS様

URL : <http://mousoudokei.undo.jp/>

MAIL : tak.e.p@theia.ocn.ne.jp

とある 妄想 の 超電磁 本

2009 SUMMER MOUSODOKEI PRESENTS For Adult Only